輝け! けんせつ小町

# 現場監督

## 土江彩季

東亜建設工業株式会社 大阪支店
大阪統括事務所 関空作業所

「けんせつ小町」は、日建連が定めた建設業で活躍する女性の愛称です。

# my Beginning 私が建設業界に入った理由

# “得意”を生かしたものづくりがしたい

写真：山田新治郎



**海洋土木という得意分野を持つ東亜建設工業㈱に魅力を感じ、入社を決めた今号の小町。一年目は大型作業船による浚渫工事に従事し海に関する知識を身に付け、二年目となった今は空港の護岸整備の現場で、陸上工事のノウハウを学んでいる。**

### 人を動かして大きなものをつくりたい

「保育園にあった二階建ての小屋をみんなで補修したことがとても楽しく、今でも忘れられません。小さい頃は大工になるのが夢でした」

土江は幼い頃から自分の手で何かをつくり上げることが好きで、進学の際はものづくりについて学べる高等専門学校へ入学した。

「学校では主に土木分野の勉強をしていました。でも好きだった授業はコンクリート実験なんです。実験結果に対して考えを巡らせ、違う強度で試したらどうなるか分析するプロセスに楽しさを感じていました」

研究することが好きだったと話す土江だが、就職活動で研究職を考えることはなく、施工管理職一択だった。

「仕事ではまわりの人を動かして、規模の大きなものをつくりたいという想いが強くありました。何か得意なものがある会社で働きたいと思い、いろいろと調べましたね」

大型船を使った海上工事に対して好奇心もあった土江は、二〇一六年、海洋土木を得意とする東亜建設工業㈱に入社する。

### 陸上と違う工事に戸惑いの連続

土江が初めて配属された現場は、大阪港に新しくコンテナバースをつくるための浚渫工事。やってみたいと思っていたことが初めての現場で実現したが、ここからが苦労の連続だった。

「マイナス一六メートルまで掘る海上工事だったのですが、海図が読めないのでどこで何をしているのかが分かりませんでした。海の地図ということは分かるのですが、マークが特殊で理解できない。図面と全然違うんです。測量にしても海の中を測るので陸上とは違う段取りでついていけず、海には目印がないので今自分がどこにいるのかさえも分かりませんでした」

今まで勉強してきたことが覆されたような気持ちになり、土江は焦りと不安にかられた。

天候や海象が工事に大きく影響する海上工事。まず海を知ることが土江の最初の仕事となった。

「陸上工事よりこまめに連絡を取り合うことが重要です。船は急に曲がれないので、航路の確認をしっかりしないと大事故に繋がります」

業務の合間に時間をつくったり、若手社員のワーキングで海に関する知識を身につけていくだけでなく、書類作成から竣工まで携わること

上／日々変化する現場をまわるのは楽しいと土江は話す。
下／現在担当している現場。護岸のコンクリート打設は完了し、盛り土の埋め戻しを行っている。

## my style

街を歩きながら写真を撮ることが好きです。就職を機に大阪で一人暮らしを始めましたが、まだまだ街のことを知らないので時間があったらカメラを持って探索をしています。今度、初めて工場夜景を撮りに行くんです。この取材でカメラマンさんに撮り方のコツを教えてもらったので、それを実践してうまく撮りたいと思います。

卒業旅行で広島県尾道市に行った時に撮影した1枚。

右／護岸の上部に有刺鉄線を張り、最終仕上げ段階の現場。滑走路に近いので航空機の運航状況の確認も欠かせない。
上／事務所での資料整理やスケジュール管理も重要な仕事なので気が抜けないと話す土江。
下／職員、職人のみなさんとの集合写真。土江の右隣が岸上所長。現場はアットホームな雰囲気で笑顔が垣間見えた。

# my Growing 私が建設業界で学んだこと
# 誰のためにつくるのか考える

で、工事の流れを把握できたと土江は話す。

「海の中の工事だったので竣工を迎えても風景には全く変化がありませんでした。なので完成した瞬間の感動より、終わったんだなという安心感のほうが大きかったです」

海上工事ならではの難しさに戸惑うこともあったが、自分で考え多くを学び一回り成長できた経験となった。

## 苦手だったコミュニケーション

大阪港の現場が竣工を迎え、二〇一六年十月より土江は関西国際空港の二期島護岸補強工事現場に勤務している。工事は全長一三キロメートルの護岸の内六キロメートルの区間において、三トルの嵩上げを実施するものだ。土江は空港という特殊な現場で、コンクリート工や道路土工など様々な工種の管理を担当している。

「滑走路のすぐ隣での作業なので、クレーンの高さ制限があったり航空機が通る時はその真下を通ってはいけないなど様々な制約があります。職人さんには、その周知を徹底するよう常に意識しています」

現場の概要や留意点について力強く説明してくれた土江だが、配属当初は大きな悩みがあったと言う。

「実は人と話すことが苦手だったので、職人さんとのやりとりが最初の関門でした」

海上工事より多くの人と接することに思い悩んだ土江だったが、気さくに声を掛けてくれる上司や先輩、職人たちの優しさにふれて徐々に打ち解け、今ではしっかりと現場をまとめている。

「働き始めてからデスクワークの重要さを実感しました。働く前は施工管理は現場での仕事がメインだと思っていたので、現場でつけた記録データをまとめたり、スケジュールを立てるほうが大事な仕事というのは驚きでしたね。今は出来上がりから工事の段取りまで一通りの流れを頭で想像するよう心掛けています。想像して分からない部分はまず調べる。それでも分からなかったら上司に聞くようにしています」

自分の指示で、何もなかったところに目に見えてカタチができていく。段取りひとつで工事が大きく左右されることを学んだ土江は今、先を読むということを意識しながら働いている。

## 自分の仕事は誰のためか

現場だけでなく、研修や先輩の経験談から得るものも大きいと言う。

「研修の講師の方に『自分たちがつくっているものは何か?』と問われたんです。〝単純に構造物をつくっているのではなく、そこを使う人たちのための空間をつくっている〟というのが答えでした。その話を聞いてからは、使う人のことを考えて管理をしっかりするようになったりと、仕事に対する姿勢や意識が変わりました」

初めは難しかった職人とのコミュニケーションも、今では雑談を交えながらやりとりをするまでの仲になった。

岸上所長は土江についてこう話す。

「現場のことを常に考えており、真面目で頑張り屋です。きつい時も決して顔に出さず、同年代のなかでも一番の努力家だと思います。新たに始まる工事では、次のステップとして主担当を任せようと考えています。大変なことも増えると思いますが、今後の更なる活躍と成長に期待しています」

次なる目標は「土木施工管理技士二級の合格」と意気込む土江。以前は右も左も分からず船員にリードされがちであったが、いろいろなことを経験した上で、いつか海上工事に一から携わってみたいと抱負も語ってくれた。

技術者の道を駆け出し始めたばかりだが、自分が進むべき方向を見定めそこに向かってひたむきに努力する。その頑張りが花開く時は必ずやってくるだろう。

**profile**

つちえ・さき●1996年、島根県生まれ。幼い頃からものづくりが好きで、高等専門学校の環境・建設工学科に進学。就職活動の際は、海洋土木という強みのある会社で働きたいと思い、2016年、東亜建設工業㈱に入社。大阪港夢洲浚渫作業所に約半年従事し海上工事の経験を積み、同年10月より関西国際空港2期作業所に配属となり、今に至る。